

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770213

研究課題名(和文) 日本近世における旅の歴史的特質の解明

研究課題名(英文) Explication of the Historical Characteristics of Travel in early modern Japan

研究代表者

高橋 陽一 (Takahashi, Yoichi)

東北大学・東北アジア研究センター・助教

研究者番号：40568466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)： 当研究の目的は、日本近世における旅行者の記録(道中日記・紀行文)の分析から、当該期の旅の歴史的特質を解明することであった。研究期間前半では上記記録の収集、後半ではその分析と先行研究の整理に重点を置いた。一般庶民の旅の全体的な行程と旅先での行動の解析から、従来強調されてきた観光に対し、実際の旅の性質には信仰的側面が濃厚に備わっていることを明らかにした。一方、同様の解析から、知識人層は過去にとらわれる「追憶の旅」を行っていたことが判明した。
以上の検証結果から、近世の旅の性質はその性質的な多様性にあるという結論が得られた。この結論を盛り込んだ成果として、著書を発表することができた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to elucidate the historical characteristics of travel in early modern Japan through an analysis of traveler's records (dochu-nikki and kikobun). In the first half of the study period, I put an emphasis on the collection of these travel records. In the second half, I focused on analyzing these records and organizing previous research on the history of travel in early modern Japan. By examining the routes of travelers and their behavior at their destinations, I found that travel in the early modern period had strong religious characteristics, in contrast to previous research that had focused on tourism. It was also found that intellectuals engaged in a kind of "travel of reminiscence," influenced strongly by the past. From the research described above, I concluded that the unique feature of travel in early modern Japan was its diversity of characteristics. As a result of this study, I published a book incorporating the conclusions of my research.

研究分野：日本近世史

キーワード：旅 近世 道中日記 紀行文 自然景観 史跡 信仰 観光

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究史

日本の前近代の旅に関する研究は、新城常三の『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、1982年)を実質的な嚆矢とする。新城は、古代においては自発的な旅は皇族や貴族といった特権階級の寺社参詣に限られており、中世には上記条件の向上や講の発達により、強固な信仰心をもつ宗教者や武士、一般農民の間でも参詣の旅が行われるようになったが、大衆化するに至らなかったとした。その上で、近世には交通条件の本格的な改善や民衆生活の向上等を背景に参詣量が顕著に増加し、信仰ではなく、旅自体を楽しむ物見遊山(観光)の旅が生まれ、発展したと結論づけた。この「近世の旅=観光」という見解は、旅の特質を規定する枠組みとしてその後長く定着してきた。

2000年代に入ると近世旅行史研究は活況を呈した。原淳一郎は『近世寺社参詣の研究』(思文閣出版、2007年)の中で、人々の寺社参詣の目的が「自己解放」にあり、実際の行動において「身体的自己解放」(信仰性重視)と「精神的自己解放」(行楽性重視)が併存し、相互に繰り返されていく点に、参詣旅行の特質を見出している。また、高橋(研究代表者)は近世の温泉旅行を分析し、一見すると遊山と受け取れる自然観賞や趣味への傾倒といった温泉滞在中の行動が、実際には養生、すなわち療養行為の一環として近世社会で認知されていたことを明らかにした(2012年)。

(2) 研究開始当初の状況

以上のような研究史からまとめると、研究開始当初においては、従来の旅行史研究の対象が寺社と温泉に偏っており、近世の旅の特質が総合的分析をもとに論じられるに至っていないという情勢にあった。さらに、新城の研究に対する疑義も生みだされつつあったが、「近世の旅=観光」という理解が依然として学界全体に根強く浸透している状況にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本近世における旅行者の記録(道中日記・紀行文)の分析から、当該期の旅の歴史的特質を解明することにある。

今日において、旅は最も代表的な文化的行為として社会に定着しているが、旅が身分・階層を問わず広く民間に浸透し、大衆化したのは古代中世でも近代でもなく、近世であった。現代の特徴的大衆文化の源流をたどる意味で、近世旅行史は重要な研究テーマである。しかし、当該期の旅に関しては、先述の如く、実際には目的地が多彩であるにもかかわらず、研究対象が寺社や温泉に限られ、その性格は「観光」という見方に偏っていた。本研究はこうした偏りを問題点と捉え、自然景観や史跡を巡る旅をも対象とし、旅行者の意識

面の分析を基にその特質にアプローチすることを具体的な課題とした。

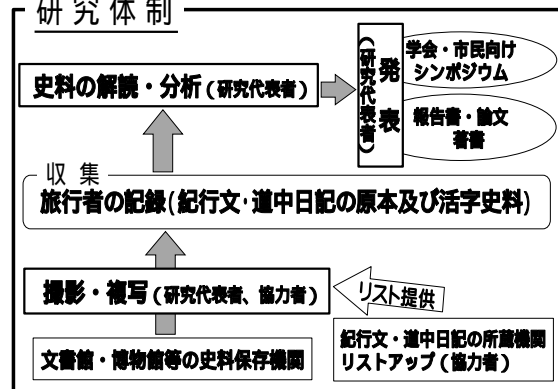
一方、「近世の旅=観光」という見方を再考するにしても、今日の旅が観光中心であることは否定できない。古代中世から近世の旅の大衆化という画期を経て近代に至り、その性格が変容してきたことが想定されよう。本研究では、先述した旅の記録の分析結果を、歴史学以外の観光諸学で積み上げられてきた議論を取り込みながら考察し、観光旅行が歴史的にいかなる過程を経て発生してきたのかを明らかにすることも副次的な課題とした。

3. 研究の方法

既述の如く、本研究では新たな分析対象の導入を予定している。このように場合に骨格となる作業は、その対象に関する史料の発掘と地道な収集活動、及び基礎的分析である。とりわけ本研究においては、旅行者が書き残した記録をどれだけ網羅的に数多く収集できるかが、研究内容を充実させる上での鍵となる。この点、東北地方(奥羽地方)には、近世の人々が好んで訪れた風光明媚な自然景観や史跡を内包する地域が多く存在し、他の研究者が未解読の記録も数多く残されている。定められた期間内で全国津々浦々を研究対象とすることは非現実的でもあり、当面は研究代表者の所属機関が位置する東北地方を立地とする記録、および東北地方を来訪した記録の収集を集中的に行うこととした。

記録のうち、道中日記に関しては研究代表者が卒業論文執筆時に部分的に収集したが、調査は不十分であり、その後刊行物等で活字化された史料もあった。また、近世の紀行文はそもそも歴史研究で分析素材とされることが少なかった。したがって、両史料については、まずどこにどの程度所在しているのかを把握する作業が必要であった。これは、本研究以前に交付を受けた科研費(課題番号23720313)において、学生アルバイトの協力で作業を行い、史料のリストアップを進めていた。本研究においても、作業を継続して新たな史料の発掘に取り組みつつその収集と分析に当たることにした。

研究体制



4. 研究成果

(1) 史料の収集と分析

今回、具体的に収集したのは東北から畿内(上方)への旅の道中日記と、東北および東北以外から松島(現宮城県松島町)への旅の道中日記・紀行文である。前者は、伊勢参宮の旅とも言い換えることができる、近世で最もスタンダードな旅である。一方、後者の松島は風光明媚な自然景観と史跡で近世から全国的に著名であった。また、道中日記は簡潔で客観的な記述を特徴とする庶民の旅の記録で、紀行文は詳細で主観的な記載もみられる知識人の旅の記録である。両史料の分析から、近世を代表する庶民旅行と景勝地への旅の特徴を析出することを目論んだ。

これらの史料のうち、自治体史等の史料編や紀行文集成等の史料集として刊行され、活字化されているものは適宜購入、もしくは借用・取り寄せたものを複製し、入手した。一方で、未だに解説・分析されることなく、いわば「未発掘」の状態で博物館・図書館・資料館といった歴史系の史料保存機関に収蔵されている史料も多数あり、それらは現地に赴いて写真撮影や複製を実施し、入手した。2014年・2015年はこの史料調査に重点を置いている。

研究期間の3年間で収集した史料は約200点であり、それまでに収集していた史料と合わせ、約300点が本研究の分析素材となった。近世の旅の記録をこれだけ収集したこと自体が一つの大きな成果であり、後に出版した拙著に行程なども盛り込んだリストを掲載した。

収集した道中日記と紀行文は逐次解説し、まず年代と往復の行程で特徴が把握できるように基礎リストを作成した。さらに畿内および松島での旅行者のミクロな行動も抽出し、特に現代の旅と異なっている行動や旅先での感想に注目し、近世ならではの旅行者の意識を浮き彫りにすることを試みた。

(2) 得られた知見と成果の公表

以上のような研究の土台となる史料の収集と基礎的分析から得られたのは、以下のような知見である。

まず、東北から畿内方面を旅した道中日記の分析からは、往復のルートが同じ地点を2度通らない、すなわち円環的行程をたどっていることが判明した。これは四国遍路をはじめとする巡礼のルートの特徴と同様である。また、旅行者が高い確率で畿内へ入る前にまず伊勢神宮に参詣していること、畿内で西国巡礼の札所を廻らず観光旅行をしているようにみえる旅行者が、京都において宗教的要素の濃い禁裏参りを行っていること、などが明らかになった。ただ、その一方で、松島などでの自然観賞や一部の寺社への参詣では、人々が観光と把握しうる感動体験に浸っていることも判明した。

紀行文の分析からは、知識人の旅が円環的

行程を辿らないケースが多いこと、松島で一般庶民が訪れない雄島という古代中世の歌枕・霊地を頻繁に来訪し、過去を彷彿とさせる風景を求めるなど、その内容が信仰でも観光でもない、「追憶」といえる性格を備えていることが判明した。

かかる点から、まず近世の庶民の旅は観光中心ではなく、その基底的目的は信仰にあり、観光は行程の中で時折付随的に体感できる経験であったとする見解が得られた。さらに、知識人や古代中世の非自発的な旅の性格を念頭に置くと、近世の旅全体に通貫する特質は、その自発性の強さと性質的な多様性にあると考察することができた。こうした結論をもとにすると、近世は信仰から観光へと旅の性格が変容する過渡期であり、観光地の形成に関しては、近代以降の旅行者・地域・政府の動向を視野に入れ、段階を設けてそのプロセスを把握する必要があるといえる。

以上のような知見を盛り込んだ成果が拙著『近世旅行史の研究 信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』であり、研究最終年度の2016年に刊行することができた。本書は、「旅行史」を冠した本邦初の研究書であり、後半部分に本研究以前に行っていた旅先側(温泉)に関する論文も掲載し、「旅行者論」と「旅先地域論」の2部構成となっている。終章では、分析対象とした温泉を例に、他分野の成果も参照しつつ、近世から近代にかけての観光地形成の段階を試論的に示した。

本書は、本研究の成果公表であると共に研究代表者の卒業論文以来の研究総括であり、分析対象を拡大して新たな知見を得ることで旅行史研究の裾野を拡大し、研究の体系化への道筋をつけた点で非常に重要な意味を持つ。今後、諸外国の旅行史研究や近世以外の時代の研究との接点を模索することで、研究を学際化させていくことも可能になるだろう。

なお、近世松島における旅行者の行動分析については、上記拙著のほか、一般市民向けの講演会でも成果を公表している。

(3) 副次的成果

東北地方の景勝地として松島と並び称されたのが、出羽国象潟(現秋田県にかほ市象潟町)である。松尾芭蕉が訪れたことでも知られるこの地は、松島と同様、島々と水面が秀麗な美景を織りなしたが、文化元年(1804)の大地震によって、土地の隆起がみられ、その後潟の全域が開田された。

研究代表者は松島と双壁をなす象潟の歴史的展開にも興味を持ち、道中日記や紀行文の分析を行った。松島旅行の特徴をより明瞭にする意味でも必要な作業だと考えてのことだが、結果、予期しない成果を得ることができた。

従来、象潟では文化の大地震による土地の隆起によって潟は消滅したと考えられていた。しかし、収集した紀行文の中に、大地震後の文化4年(1807)に象潟を訪れ、水面の

残った潟を描写したものが見つかった。土地の隆起によって潟は部分的に陸化した、過半の潟は残存していたのである。

この発見にもとづけば、大地震後の潟の開田の理解も変更を余儀なくされる。「潟だった土地が隆起したために、耕地化した」と単純に割り切ることができなくなるのである。その後、他の史料に当たった結果、大地震をきっかけに象潟周辺の塩越村住民主導で潟の開田が計画され、領主の本荘藩の承認のもと、陸化せず残存していた潟まで開田されてしまったとみられることがわかった。象潟の美景は自然災害と人為的開田の両作用で失われたのである。近世においては、いかに風光明媚な景勝地であっても、周辺に暮らす人々にとって、そこは生業活動の対象となる空間に過ぎなかったということになる。

ただ、一連の村民の動きは決して景観破壊の蛮行として捉えられるべきではない。大地震の影響で交易などが衰退し、塩越村の中心をなす町場では、経営不振となる家がみられた。また、地理的条件により、そもそも村の耕地面積は狭かった。こうした条件において、潟の開田は村民の生存を維持する上で必須であった。本荘藩は旅行者を誘致して村の活性化をはかるよりも、農業を拡大する方が安定した生計の糧になるという現実的判断のもと、震災後の領民の生活を保障するために、潟の開田を許可したのである。

以上のように、紀行文と景勝地の地域住民の生業に視座を据えた分析から、観光産業の振興により地域経済の底上げや安定化を図るような政策的発想を基本的に持ち合わせていないという、旅行史上における近世領主の政策的特質を抽出することができた。1点の紀行文中の発見から、新たな歴史解釈が導き出されたのである。

この検証結果は、所属部局における他の研究者との共同研究の成果論文集（拙編著）において、「景勝地と生業 出羽国象潟の開田をめぐって」と題して公表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

高橋陽一、近世の定宿講と旅行者 浪花講の事例から、郵政博物館研究紀要、査読有、8号、2017、pp45 - 59、

http://www.postalmuseum.jp/publication/research/research_08_all.pdf

高橋陽一、景勝地と生業 出羽国象潟の開田をめぐって、旅と交流にみる近世社会（高橋編著）査読有、巻数なし、2017、pp114 - 145

高橋陽一、旅の行程とその特徴 道中日記・紀行文の統計的分析、近世旅行史の研究 信仰・観光の旅と旅先地域・温泉（高橋著）査読無、巻数なし、2016、pp58

- 147

高橋陽一、道中日記にみる庶民の観光、近世旅行史の研究 信仰・観光の旅と旅先地域・温泉（高橋著）査読無、巻数なし、2016、pp224 - 248

高橋陽一、石碑のある風景 近世の旅行者と松島、東北アジア研究、査読有、19号、2015、pp123 - 147、

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2015/asia019.html>

〔学会発表〕（計 4 件）

高橋陽一、景勝地と生業 出羽国象潟の開田をめぐって、第 55 回近世史サマーセミナー、2016 年 7 月 16 日、ファミリー神立（新潟県・南魚沼郡湯沢町）

高橋陽一、近世における旅の行程とその特徴 道中日記の統計的分析、2015 年度東北史学会大会、2015 年 10 月 4 日、東北大学（宮城県・仙台市）

高橋陽一、近世の松島と旅行者 名所雄島の石碑、2014 年度交通史学会シンポジウム「東北の名所 松島・塩釜のあゆみ」、2014 年 9 月 20 日、東北大学（宮城県仙台市）

高橋陽一、石碑のある風景 近世の松島と旅行者、2014 年東北近世史研究会夏のセミナー、2014 年 8 月 30 日、さんさ亭（宮城県・刈田郡蔵王町）

〔図書〕（計 2 件）

高橋陽一、清文堂出版、近世旅行史の研究 信仰・観光の旅と旅先地域・温泉、2016、451

高橋陽一他、清文堂出版、旅と交流にみる近世社会、2017、1 - 15・114 - 145

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 陽一（Takahashi, Yoichi）

東北大学・東北アジア研究センター・助教
研究者番号：40568466